

イチジク

1. 原生地と産地形成

1) 原生地と伝播

イチジク属の植物は 600 種を超えるといわれ、いずれも乳液を出すことが共通している。果樹として栽培されているのは、イチジク (*Ficus carica* L.) 1 種のみである。

原生地は小アジアのカリア (Caria) とされてきたが、アラビア南部の肥沃地が原生地である。現在、栽培種の祖先とみられる、カプリ系は西南アジアに野生している。

西南アジア地域におけるイチジク栽培の歴史は、アダムとイブの時代から人間の歴史とともに歩んでいる。西ヨーロッパへの伝播はシリアにおけるアラビア人によるもので、アラビア人はイチジクの栽培と品種改良に著しい功績を残した。中世紀におけるアラビア人の西ヨーロッパへの勢力の拡大は、スペイン、ポルトガルへの栽培の普及となり、今日の乾燥イチジク産業の興りとなった。

中国へのイチジクの伝来は、8 世紀の頃ペルシアからという説があり、「無花果」という文字は 14 世紀末に現れているという。米国への導入は、16 世紀末にスペインの移住者によりもたらされたものである。

わが国への渡来は、中国を経て来たという説と、寛永年間 (1600 年代) に西洋・南洋を経て長崎に渡来し、それが広まったとの説がある。イチジクのことを唐柿、蓬萊柿、南蕃柿と称していることから、渡来果樹であることは確かである。

2) わが国における栽培概況

わが国への渡来は約 400 年前とされ、江戸時代においては紫果品、白果品の 2 品種が栽培され、現広島県が特に有名な栽培地であった。現在も、在来種として‘蓬萊柿’は広く栽培されている。明治時代に、多数の品種が主として米国より導入された。しかし、明治時代のイチジクは散在果樹の域を出なかった。

経済栽培は大正時代に入ってからであり、大正時代中期には、広島県、兵庫県、大阪府、愛知県、神奈川県等が主要な産地であり、栽培面積は1,000ha位と推定されていた。第2次大戦中には、他の果樹同様に面積は減少し、昭和28年には609ha、51年には902ha、平成15年には1,199haとなっている。現在の主産地は、愛知県が194.8ha、福岡県146ha、和歌山県91.2ha、広島県73.6ha、兵庫県69.1ha、岡山県66.2ha、宮城県58.7ha等である。

4 . 栽培管理

1) 苗木の繁殖

イチジクの繁殖法としては、挿し木、接ぎ木法があるが、特別なことが無いかぎり、挿し木法がとられている。

挿し木に使う穂木は、前年生枝の節間が短く充実した、病虫害の潜伏していないものを用いる。採穂の時期は、樹液の流動開始直前の時期、遅くとも2月下旬までである。穂木の貯蔵には0~5℃が適温であり、過湿・過乾にならないように注意する。挿し木の時期は、暖地では2月下旬~3月上旬、寒地でも3月下旬までである。遅くなると、活着後に生育不良となる。

挿し穂の長さは2節(20cm)位が適当で、上部は節間で、下部は節の直下で切り、頂部以外の芽はかき取るとよい。なお、挿し穂の長さが前年生枝の部分だけでは足りない場合には、2~3年生の古い部分を含んでもよく発根する。

挿し木の場所は、排水良好で保水力のある壤土、あるいは砂壤土の所がよい。イチジクの根にはネコブセンチュウが寄生しやすいので、前作の作物に注意する必要がある。ナス科の野菜類、サツマイモ、モモ等が栽植されていた果樹園の跡地は、避けることが賢明である。一方、忌地現象が出るので、イチジクの跡地、紋羽病の多い桑園跡地も避けねばならない。イネ科作物の跡地が安全である。

挿し木の方法は、30cm程の間隔で先端の芽がわずかに見える程度に真直ぐか、あるいは斜めに挿し込む。

2) 開園と栽植

(1) 開園

土壌条件としては、イチジクは、耐水性が弱く、しかも、生育期間中の水分要求量が多い。そこで、排水のよくない所、耕土の浅い所では、暗きよ、側溝を設け地下水、地表水の排水条件を良好にする必要がある。また、耕土を深くして根を深く入れる条件を整えるとともに、乾燥に備えて灌水施設を備えることが生産安定の要件である。また、畑地、樹園地、桑園等の既耕地に開園する場合、センチュウ類は勿論のこと、紋羽

病、菌核病等の存在には十分な注意を払う必要がある。なお、植え付けに先立ち、土壌酸度の是正を兼ね、石灰あるいは苦土石灰等の土壌改良資材を堆肥とともに十分に施し、全面の耕起、整地を行うことが望ましい。

(2) 植栽

植栽する苗木は、ネコブセンチュウの着生には特に嚴重に注意する必要がある。植え付け時期は、落葉後～3月下旬までの期間いずれでもよいが、寒地や冬期乾燥する所では春植えがよい。暖地では秋植えの方が、生長がよい。植え付け時期が遅すぎると、生育が劣るばかりか、遅伸びし、次年度以後の生育に悪影響を残すことになりやすい。

植え付け本数は、圃場の条件、品種及び経営方針により異なるが、一般に経済栽培を行う場合、成木時点において木の大きくなる‘蓬萊柿’で10a当たり20本(7m間隔)、その他の品種で33本(5.5m間隔)が基準であろう。しかし、粗植では初期の収量が低いため、他の果樹と同様に当初は密植し、逐次間伐して行く方法が多くの場合に採用されている。

3) 整枝・剪定

(1) 整枝

わが国のイチジク品種は、夏果専用品種、夏秋兼用品種であるが、営利栽培においては秋果生産を目的とする栽培がほとんどである。秋果は、発生する新梢に例外なく結実するので、整枝や剪定には、他の果樹ほど気くばりをしなくてもよい。しかし、イチジクは経済樹齡が比較的短く、浅根性で風により倒れやすく、葉ずれによる傷害果の発生が多く、収穫に手間がかかること等から、各地で品種、立地条件に合わせた樹の重心の低い、平面的な仕立て方の樹形がとられてきている。主な樹形を示すと以下のようなになる。

一文字型整枝：植付けた苗木は、40～50cmの高さに切り返し、主幹とする。新梢がわずかに伸長した頃、勢力の揃った、発生角度の広い、左・右の2本を残し、他は全部かき取る。残した新梢は先端部の下垂を防ぐため、斜に支柱を立てて誘引する。この枝が主枝となる。冬期剪定では、主枝の先端部は充実のよい所で切り返す。一方、春先までに主枝

の方向に添って、主幹の高さに径 1mm 位のパイプか、8～10 番の鉄線を張る。

第 2 年目に樹液の流動の始まる 4 月中旬頃に、上記の線に主枝をねじり曲げながら倒して結束する。先端の芽が、主枝を倒した時に側方に向くように、剪定の際に注意して切っておく。主枝上の芽は先端部から逐次基部に向かって発芽、伸長を始めるが、最先端の芽は将来主枝の延長枝となるので斜に支柱を立てて誘引する。主枝の両側に伸びる芽の一部を結果枝として、交互に 20cm 位の間隔（片方 40cm 位の間隔）に残し、他は全部かき取る。不要の芽のうち、先端部附近のものは早くから強勢に伸びるので、早いうちにかき取ることが必要である。結果枝は支柱を立てるか、地上 120～150cm に鉄線を張り、これに誘引する。冬期剪定では、主枝延長枝は前年同様に充実のよい所で切り返す。結果枝は基部 2～3 芽の外側の芽で短梢に剪定して、結果母枝として使う。

第 3 年目の春期、主枝の延長は第 2 年目と同様の操作を行い、結果部位の拡大を図る。冬期剪定では、ほぼ樹形は完成する姿となるので、主枝の最先端の芽は、隣接する木の先端部との間隔を考慮して、上芽で切り止める。主枝の結果枝は基部 2～3 芽で、結果母枝上のものは、基部 1～2 芽で短梢に剪定する。

X 字型整枝：植え付けた苗木を 50cm 位で切返す（主幹となる）。発芽した新梢のうち、ほぼ勢力の揃った 4 本を発生方向を考慮して残し、他は全部かき取る。残した新梢を主幹との発生角度を広く取りながら 4 方向に、先端部が下垂しないよう支柱を添えて誘引する。冬期剪定では 80～90cm 位の所で、外芽の位置で剪定する。これが主枝となる。次いで、先端が下垂しないように、主枝の分岐点よりやや高目に丈夫な杭を立てて固定する。

第 2 年目の春、各主枝に側面より発生した 4 本の新梢を、交互に 20cm 位の間隔で残し、他の芽はかき取る。先端の芽は主枝の延長方向に、他の芽は側方に支柱を立てて誘引する。冬期剪定は、外芽で短梢に剪定する。芽の位置が高くなり過ぎないように、ほぼ同水準に揃え、結果枝の発生位置を主幹の高さ付近に維持する。この枝が結果母枝となる。これで

一応樹形が完成し、その後は年々1樹当たり30本内外の結果枝を立てて収量を確保する。

以上の一文字型整枝法、X字型整枝法においては、結果枝上の着果位置が揃い、結果枝ごとに誘引するので風による傷果の発生は少なく、果実の揃いがよい。収穫に簡便である利点があるが、結果枝が密生すると、葉が重なり下部への光の透射不良となり、果実の着色不良を起し、品質が低下するので結果枝の本数には注意が必要である。

その他、開心自然形、盃状形仕立て等があり、一長一短である。

(2) 剪定

果樹の剪定には、冬期の休眠期間中に行う冬期剪定と、生育期間中に行う夏期剪定がある。生育期間中に行う、芽かき、摘心等は、新梢の間引等と同様に夏期剪定の中に入る。

冬期剪定

イチジクは品種により結果習性が異なるため、剪定の方法は結果習性の違いにより異なる。

夏果の生産のみを目的とする場合(サンペドロ系品種の場合)についてみれば、夏果は前年生の充実のよい枝の先端部附近にできた果実(花房)が幼果の状態越冬して、再び生育を開始したものであるから、枝の先端部を強く切り返すと果実は無くなる。従って、切り返し剪定は不都合であり、結果母枝の間引きを主体とした剪定を行う。

秋果のみ生産を目的とする場合(普通系品種)では、秋果は前年生枝(結果母枝)の各節より発生した充実した新梢の各節に着生するので、結果母枝の状態に応じた切り返し剪定を行う。しかし、新梢の密生は、果実の生産に不都合が生じやすいので、適当に結果母枝の間引き剪定を加味した剪定を行う。

夏、秋果両方の生産を目的とする場合(普通系品種)では、切り返し、間引きの2方法を併用して剪定する。通常、夏果は大果になるが、収量は秋果に比較して極めて少ない。前年の秋果の結実量が多いと夏果が少なくなり、夏果の着生が多いと秋果の収量が減る傾向にある。

頂部優勢性と剪定：イチジクは、品種により差があるが、枝の頂部

優勢性の強い果樹である。頂芽はえき芽に比べて大きく、発芽する時期も早い。頂芽が強勢に伸びると、えき芽の発芽、伸長が抑えられるか、わずかに先端部の2~3芽が伸長するに過ぎない。放任すると、結果部位は上昇して樹高は高くなり、栽培管理に不都合をきたす。この頂部優勢性を抑える手段として、枝の先端部を切除すると同時に、枝を開張させることにより、頂部優勢性を弱めることができる。このようなイチジクの結果習性と枝の伸長の特性を利用して、水平仕立てのような無理と思われる仕立て方で生産が成り立つのである。

剪定の時期と枝の切り方：時期は暖地では落葉後から翌年2月の間であればよい。寒地では厳寒期を過ぎてから行う方が安全である。時期が遅れると樹液が切口から出て発芽が遅れるので、樹液の流動開始前に剪定を終る方がよい。

イチジクの枝は木質部が粗く、しかも節間の内部には空隙の髓部があり、芽の直上で節に近く切ると、乾燥等により上部の芽の伸長が劣る場合が起こる。そこで、節間あるいは芽の直上で切って、先端の1芽を犠牲にして2番目以下の芽を利用する方法もある。

夏期剪定

イチジクは陰芽、不定芽の発生の容易な果樹であり、冬期剪定が強ければ強いほど芽の発芽、伸長もよいが、それと同時に隠芽、不定芽の発生も多くなる。そこで、適宜、芽かき（除芽）、摘心、間引きを行う。しかし、これら夏期剪定の過度の実施は、一般に栄養生長を助長し果実の品質を低下させ、樹体の充実を妨げ、翌年以後の生産にも悪影響を残すので注意したい。

4) 肥培管理

イチジクの施肥で他の一般果樹と異なる点は、果実が伸長する新梢のほとんど全てに着生し、次々と成熟してその期間が長期にわたる。そこで、肥効が大きな変動なく長期に持続することが必要とされる。結果習性から比較的強い剪定を行うため、施肥量が多くなる。肥料の種類、量、方法は、品種、土壌、気象状態、仕立て方及び植栽本数により決められるべきである。

イチジクは根の酸素要求量及び生育期間中の水分要求量が大きく、また、土壌の酸性化を嫌う性質がある。従って、耕土を孔隙量の多い膨軟な状態に保ち、下層土の pH が下がらないように注意を要する。

5) 熟期促進

前にも述べたが、葉えきに次々と着生する果実は、着生部位に関係なく各生長期間、成熟までの期間はほぼ一定で 75～80 日で完熟する。未成熟果の段階で油処理あるいは生長促進剤の使用により 5～10 日位成熟を促進することができる。この熟期促進の効果のねらいは、早期出荷による収益の増加、気象災害の回避、計画出荷及び収穫の能率化、収穫ピーク時における労力配分の均等化、秋末期における未熟果の救済による収量の増加にある。

油処理：果実の第 2 期生長期の末期、自然成熟日より 15 日位前に、果頂部の開口部（目という）に油さし、筆等を用いて少量（0.2ml 位）の植物油を注入すると、5～7 日後に自然成熟果と同様の果実が得られ、熟期が 7～10 日促進される。

処理時期が適期より早いと、果実の外観は変わらないが内部の小花が未熟で商品価値をなくす。処理時期が遅いと、それだけ促進日数が減ることになる。使用する油は菜種油、大豆油等植物性食用油ならその効果は変わらない。

エテフォンの使用：前記油処理と同時期にエテフォン処理を行うと、ほぼ同様の効果が得られる。処理の適期は、油処理より 1～2 日遅らせるとよいが、余り早い時期に行うと萎凋落果を起こすか、発育はするが内部の未熟な価値のない果実となるので注意を要する。

処理は果実全体にする必要はなく、一部の処理で効果は十分である。処理液の濃度は気温の高い 8 月では 100ppm、気温が低下する 9 月中・下旬以降及び樹勢の強い樹では、200～250ppm をハンドスプレーで散布するのが適当である。

6) 病虫害防除

イチジクの主な病害として、疫病（白腐病）、炭疽病、胴枯病、さび病（赤渋病）、黒かび病等がある。害虫として、センチュウ類、カミキ

リムシ類、モンキシロノメイガ（モンキオオメイガ、イチジクミムシ）
等がある。

3 . 形態と生理・生態

1) 形態

樹は半高木性の落葉樹であり、根は黄褐色の繊維状をしている。枝幹部の表面には小突起、あるいはこぶ状の突起がある。枝は灰緑色で着葉部の直上に線があり、その上部に着果部のえき芽が並んで節となっている。枝の内部の節間には髓部がある。葉は大きくて粗毛があり、葉脈は鮮明である。葉形は一般に手のひら状に 3~7 裂しているものが多く、着葉部位により形が変わることがある。花は隠頭花序をなし、花托の内壁に肉質の花が多数着生する。花には、雌花、雄花及び虫えい花の 3 種類がある。

果実は発生学的にその構造は他の果樹のものと異なり、肉厚花托と呼ばれているもので、カップ状の内側に湾曲した多肉質の花托の部分と、その内面に密生する多数の小果（花）より成り立っている。果頂の中央に開口部（目）があり、果実の内部に通じ、鱗片により軽く閉ざされている。果形は、円～長楕円～洋梨形まで様々であり、果皮も緑～黄、赤、紫あるいは紫黒、青銅色まで多様である。受精により 1.5mm 位の小種子ができる。単為結果したものは、胚や胚乳は発達せず、子房壁の厚化した残がいがあり、あたかも果肉のように見える。可食部分は、肥大して肉質化した果托の部分と空の子房の部分である。

乳液分泌はイチジクに特徴的なものであり、その葉、枝、根、果実には乳管細胞があり、傷付けたりすると白色の乳液を分泌する。分泌液中には、フィシンと呼ばれるタンパク質分解酵素が含まれている。乳液が皮膚に付くと、かゆみや刺激を覚えるのは、皮膚がこのフィシンに侵されるからである。この乳液は、休眠中には分泌しない。

2) 生理・生態

(1) 花房の分化と結果習性

イチジク果実の特性からして、他の果樹における花芽の分化といわれる現象は、イチジクでは花房の分化というべきであり、その分化の時期及び分化期間は他の果樹と様相が異なっている。

新梢の伸長に伴い、基部第 1 節から上部の節へと順次芽が発生・分化

する。芽は鱗片に包まれて、その中に 2 個の生長円錐体がある。そのうち 1 個は花芽（花房）となり、他の 1 個は葉芽となる。しかし、基部 1 ~ 3 節の芽は生長円錐体の状態で停止するから、その節には果実は着かない。それ以上の各節には順次上方に向かって花房が分化して行き、発育して果実となる。

イチジクは他の果樹と異なり、発生する新梢の基部の 1 ~ 3 芽を残して全部のえき芽に花房ができる。即ち、枝の生長が可能な温度の範囲内であれば、次々と花房の分化が起こる。本年生枝の最初の花房の分化は 5 月中旬頃からであり、下旬頃には、花托内に多数の花が分化してくる。これが秋果として成熟する。夏果は前年枝の先端部分に分化したものが、分化の初期に発育を停止して越冬し、翌春に再び発育を開始したものである。従って、イチジクは同一枝上においても分化の状況が異なるのである。

（ 2 ） 果実・芽の生長

果実（花托）の発育には 3 回の周期が見られる。最初に着いた秋果についていえば、6 月中旬頃より約 1 カ月は急速に肥大生長し、その後生長速度は緩やかとなる。8 月上旬頃より再び急速に肥大、生長して中旬頃に成熟期に入る。この生長周期は果実の着生する部位（節）には関係なく、その日数はほぼ同じであり、概ね 75 ~ 80 日位である。

イチジクの芽は、晩秋の落葉後、芽の生長が可能な温度条件であれば容易に発芽する。つまり自発休眠期が全くないか、あっても剪定や摘葉により休眠が容易に打破される部類の果樹である。従って、わが国におけるイチジクの休眠期間の大部分は、他発休眠期である。

（ 3 ） 気象

気温：イチジクはもともと亜熱帯果樹であり、乾燥した半砂漠地が原生地であることから、栽培には夏の高温と冬の低温に制限される。わが国における経済栽培の北限は新潟県、福島県、宮城県を結ぶ線にあるとみられている。主要なイチジク産地は、年平均気温 15 前後、1 月の平均気温 3 以上の所にある。

耐寒性は品種により多少の差はあるが、成木においても - 10 位が限

界とみられている。若木時代はさらに弱い。地上部の生長は平均気温 15 において開始される。従って、15 以上の気温の期間の長い所が有利であり、30 を超えると生長は衰え、38 になると果実に障害が発生する。一方、冬期あるいは春期の低温は、しばしば夏果生産品種には低温障害を起させる。

日照：イチジクは耐陰性が強い方であるが、過度の枝梢の繁茂は、果実の着色不良を起すと同時に品質を低下させる。

降雨：世界的なイチジク産地は年雨量 1,000mm 以下であり、わが国の主産地も夏半期の降雨量が比較的少ない所である。特に、果実の成熟期の降雨は、果実を開裂させ品質を甚だしく低下させる。また、夏果品種は成熟期が梅雨期に当たるので雨の影響は大きい。

風：葉が大きく、枝が叢生し、長く伸長するので強風に弱く、樹の倒伏、枝の裂開、折損あるいは葉の損傷の被害を受けやすい。なお、葉の振動は、果面を傷つけて外観を著しく低下させる。イチジク栽培には、風・雨は最も好ましくない。

(4) 土壌

イチジクは比較的土壌を選ばない果樹であるが、土層が深く、通気性がよく、しかも水分供給の豊富な埴壤土、または砂壤土の所がよい。特に、根の酸素要求度が大きいので、耐水性は非常に弱く、過湿や水の停滞するような土地はよくない。土中の水が常に動いていて、酸素が供給できるような所では可成りの生育はする。

一方、イチジクは葉が大きく、葉面蒸散量が大きいので、水分要求量は大きく、しかも根は浅根性なので、果実の発育期間中の乾燥には弱い。このため、イチジクの水管理の重要性が生じてくる。

土性は酸性を忌み、中性に近いアルカリ性土壌において生育は良好である。植栽する地形は、風当たりの少ない、排水の良好な緩傾斜地あるいは平坦地が好適であり、地下水位の高い所、雨水の長時間停滞する所は避けねばならない。

5 . 消費

1) 収穫

夏果の収穫は6月下旬頃より始まり、収穫期間は3~4週間で終わる。秋果は8月上・中旬頃より始まり、品種により多少異なるが、秋期末の降霜期までの長期にわたる。普通、生食用は10月中旬まであり、それ以後は加工用となる。

完熟果は軟弱で傷みやすく日持ち不良のため、通常出荷の場合は、完熟の1~2日前に収穫する。その判定は、着色、硬さ、下垂の程度で判断するが、熟練を必要とする。

収穫の仕方は、果実の首のつけね近くに軽く指をかけ、持ち上げるようにしてもぎとる。なお、収穫の際、果梗部の切口より出る白い乳液は、タンパク質分解酵素のフィシンを含んでいて皮膚が犯されることがあるので、薄手のゴム手袋を用いるとよい。

完熟1~2日前収穫の果実鮮度の保持時間は、常温ではせいぜい1~2日である。朝採りの果実は、日中の収穫果より日持が良好である。鮮度保持には、果実温が大きく影響するので、収穫直後の予冷は鮮度保持に効果がある。予冷温度は凍結しない限り低温がよい。ただ、予冷库より出庫後の結露解消には十分注意しなければならない。予冷した果実は、保冷車にて輸送、出荷することが望ましい。なお、完熟果の低温貯蔵は、10 以下で5日間位は可能である。

2) 加工と利用

イチジクの果実は日持ちが悪く輸送にも適さないので、欧米では生食は極めて少なく、大部分は乾果として利用されている。降雨の多いわが国では乾果への加工は無理で、生食される。この他、缶詰、瓶詰、砂糖漬、ジャム等に加工されている。

また、薬用効果があるので、古い時代より珍重されてきた。果実を生食及び葉を煎用すると、痔疾、胃腹薬、便秘に効果があり、また、酒毒、魚毒を消すのにも薬効がある。乳汁を直接患部に塗る等民間の治療薬として利用されている。

2 . 分類と品種

1) 分類

イチジクは花の種類、受粉の必要の有無により、果樹園芸学的にカプリ系、スミルナ系、普通系及びサンペドロ系の4種類に分類される。

カプリ系

イチジクの原型とみなされ、ブラストファガー（ハチの一種）の幼虫の発育場所である虫えい花（短花柱の雌花）を花托内に持っている。6月頃に熟する第1期果（春果）、8月頃の第2期果（夏秋果）、3月に熟する第3期果（冬果）を着ける。寒い地方では、第1、2期果のみで第3期果はない。本種の果実は、虫がいることと、雄花が多いために食用には適さない。もっぱら、スミルナ系の受粉用に用いられる。

スミルナ系

花托には、長花柱の雌花（ブラストファガーの幼虫は育たない）のみを持ち、しかも単為結果性がないため、結実にはカプリ系の受粉を必要とする。受精により種子ができ、種子は油脂を含み、乾果にすると特有の香味があり、もっぱら乾果用に供される。この種は、わが国ではブラストファガーがない（生息不能）ために栽培はない。

普通系

最も普通のイチジクで、品種数は多い。雌花のみで、受粉しなければ単為結果する。第1期果と第2期果を着ける。わが国で栽培されている、夏秋兼用品種、秋果専用品種はこの種類に属する。秋期に遅くできた第2期の幼果は、寒い所では枯死するが、暖地ではそのまま越冬し翌春生長して第1期果となる。

サンペドロ系

スミルナ系と普通系の間接型の性質を持つており、第1期果は単為結実するが、第2期果はスミルナ種と同様受粉を必要とする。従って、わが国では本種の秋果は全部落下する。

2) 品種

イチジクの品種は数百あり、わが国にはこれまでに欧米から普通系が40品種、サンペドロ系、スミルナ系及びカプリ系がそれぞれ2~3品種

導入されている。同名異種、異名同種もかなり見られる。これらの中には品質、特に風味の優れたものもあるが、果実が小さいとか、収量性、輸送性及び日持ち性で劣るものが多い。そのため、品質面では必ずしも優れているとはいえないが、営利栽培では‘榊井ドーフィン’‘蓬萊柿’が主要品種である。

榊井ドーフィン

明治 42 年（1909）に広島県佐伯郡廿日市宮内の榊井光次郎が米国カリフォルニア州から導入した。当初ドーフィン（ビオレー・ドーフィン）として導入したが、その後ドーフィンでないことが確かめられ、以後導入者の名を冠して‘榊井ドーフィン’と呼称されている。

本品種は夏秋兼用種である。夏果は7月上・中旬に熟し、果実は150g前後の大果となる。果皮は緑色を帯びた紫赤色を呈し、品質はよいが、着果数はやや少ない。

秋果は8月中旬から熟し始め、10月下旬まで続き、収穫期間は長い。果実の大きさは70～120g程度で、わが国に現存する品種の秋果としては最も大きい。果形は長卵形であるが、一般に結果枝の下位節から上位節に進むにつれて次第に短卵形となり、また大きさも小さくなる。首部及び果梗の長さは短い。果皮は紫褐色で、薄いが強くて輸送性がある。果脈は明瞭で、果粉は中位である。果肉は桃色で、肉質は粗で比較的軟らかく、甘味がやや少なく、酸味、香りともに少ない。品質は中位である。果頂の裂開は少なく、外観がよく、日持ち性は良好である。

樹勢は中程度、樹姿は開張性である。比較的強い枝でも基部2～3節から着果する。収量は10a当たり3～4t程度あり、極めて豊産性である。冬期の頂芽は赤褐色を呈する。

幼木時から秋果がよく着果し、盛果期に達するのが早い。耐寒性はわが国のイチジク品種の中では最も弱い方に属し、冬期の限界温度は幼木で-6程度である。また、春先の低温にも弱い。病害では疫病に弱い。

果実の品質は中程度であるが、大果で外観が美しく、裂果が少なく、豊産性・輸送性・日持ち性がともに優れるため、わが国に現存する品種の中では総合的にみて‘榊井ドーフィン’に代る経済品種は見当たらない。

い。収穫期間が長く、結実性もよく、栽培しやすいので家庭用にも適する。果実は主に生食用として利用されているが、収穫末期の果実はジャム、缶詰等の加工用にも供されている。

蓬萊柿

寛永年間（1624～1644）に、中国または南洋・西洋から伝えられたとの記載があるが明らかでない。わが国最古の品種で、「在来種」または「日本種」とも呼ばれ、「唐柿」「南蕃柿」と呼ぶ地方もある。

秋果専用種であるが、年により夏果が成熟することがある。秋果は9月上旬～11月に成熟する晩生種である。果実は中の大で60～70gであり、果形は短卵円～円形で、首部が短く、果梗の長さは中位である。果皮は赤紫色で厚くて強く、果脈は比較的明瞭である。果肉は鮮紅色を呈し、肉質は粗～やや密であるが完熟すると粘質となる。糖度は16度前後で甘味が多く、酸味もややあり、香りはないが特有の風味を有し、品質は中～中の上である。成熟に伴い果頂部が裂開して果肉の変色が生じやすく、特に成熟期の降雨で著しく裂開する。そのため、一般には完熟2～3日前に収穫されるため、品質がより低下する。果実の輸送性と日持ち性はともに良好である。

樹勢は強く、樹姿は直立性で大樹となる。

耐寒性はわが国の品種の中では最も強く、わが国での分布は広い。‘榊井ドーフィン’に次いで栽培面積が多い。山陽、四国及び北九州地域でし好性が高く、この地域では生食用の栽培が盛んである。

樹勢が強いため盛果期に達するのが遅れたり、枝の切り返しが強いと強勢な新梢が発生して、下位節の着果が悪く熟期も遅れる。そのため、栽植距離を広くして主幹形か開心形に仕立て、樹勢に応じて切り返しの程度を加減したり、間引き剪定を加える等して早く樹勢を落ち着けることが本品種の栽培の要点となる。

晩生種である。果頂部の裂開が多く、収量や生産の安定性では‘榊井ドーフィン’に劣るが、果皮が強く輸送性と日持ち性に優れ、耐寒性が強いこと適応性が広いことから、今後も生食・加工用、また営利栽培や家庭用として栽培される品種である。

ブラウン・ターキー

明治 36 年に米国から農商務省農事試験場園芸部（現果樹研究所カ
ンキツ研究興津拠点）に導入された。

夏秋兼用種である。夏果は 80g 内外の大きさと、6 月下旬～7 月下旬
に熟する。果形は卵円形で、首部は細長い。果皮は淡紫褐色を呈し、果
脈は暗褐色である。裂果は少なく、品質はよい。

秋果は 50g 前後の大きさと、8 月下旬～10 月下旬に熟する。果形は果
頂部が扁平な卵円形で、首部は極めて短く、果梗は長さ・太さともに中
位である。果皮は紫褐色を呈し、薄くて弱く、果脈は明瞭である。果肉
は橙紅色を呈し、肉質は粘質で粗～やや密で軟らかい。果汁、甘味とも
に多く、酸味は少ない。食味、品質はやや良好である。

樹勢は弱く、樹姿は開張性で、樹冠の拡大は少ない。幼木期から着果
し、盛果期に達するのが早い。

豊産性で品質は比較的良好、耐寒性も強いが、‘榊井ドーフィン’や
‘蓬萊柿’に比べて果実が小さく、輸送性や日持ち性が劣るので経済品
種とはなりにくい。しかし、樹形が小さく、夏果もかなり着き、秋果の
収穫期間も長いので家庭用に適している。

セレスト

菊池秋雄は、明治末期～大正時代の導入としている。

秋果専用種で、わが国に現存する導入品種の中では成熟期が最も早く、
果実は 8 月上旬から採れ始め、大半が 8 月中に熟し、9 月上・中旬には
収穫が終わりとなる。果実は 15～20g で小さいが、豊産である。果形は
長卵形で、首部が長い。果皮は赤紫～紫褐色を呈し、果粉が多く、果脈、
果点ともに多く、熟すと小さい亀裂を生ずる。果肉は淡紫紅色で、肉質
は密で軟らかく、甘味は強く、酸味は中程度で品質は非常に良好である。

樹勢は中～やや強で、やや直立性を示す。耐寒性は強く、適地範囲は
広い。

果実は小さいが、豊産で品質がよく、日持ち性もよいので、生食用及
びアイスクリームやケーキ類への利用が考えられ、家庭用はもちろん、
今後営利栽培用としても期待したい品種である。

カドタ

昭和4年に、米国から農林省園芸試験場に導入された。

夏秋兼用種である。夏果は7月中旬に熟し、果実は50g程度、果形は卵円形で、果皮は光沢のある黄緑色を呈し、肉質は密で軟らかく、品質は良好である。

秋果は8月中・下旬から採れ、10月下旬まで収穫が続く。果実は30~60gで、採取期が早い結果枝の下位節の果実は大きい、採取期が遅れるにつれて小さくなり、大小の変異が大きい。果形は卵形で、首部が太くやや長い。果皮は黄~黄緑色で光沢を有し、厚さと強さはともに中位で、果脈明瞭である。果肉は白~淡紅色で、密で軟らかく、糖度は16度前後で甘味が多く、品質は良好である。雨で果頂部が裂開、酸敗しやすい。

樹勢は強く、樹姿は直立性でやや大樹となる。成木になると枝が密生するので、樹間を広くして樹勢を安定させるとかなりの収量が期待できる。耐寒性はかなり強いと思われる。

果実は果皮が強くて輸送性があり、光沢があり美しく、品質良好で日持ち性もよい。欧米では乾果、缶詰、砂糖漬等の加工用として利用されている。家庭用としてはもちろん、生果用及び加工用としての営利栽培を期待したい品種である。

その他、‘ホワイト・ゼノア’等がある。